

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015」



地方創生担当大臣賞受賞報告

大澤 義明 (筑波大学社会工学域)

1. はじめに—津別—

2015年12月13日、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015」の最終審査会があり、「大学生以上一般の部」にて、筑波大学「都市計測実験室」が地方創生担当大臣賞を獲得した。応募総数701件、最終選考6件、その中での第1位と大変な名誉であり、表彰式では発表学生ともども石破茂地方創生担当大臣より直接授与を受けた。

副賞は10万円の商品券である。表彰式直後に講評された石破大臣の第一声は、「10万円飲むな、ただし地方を語りながら飲むのであればいいぞ」と、まさしくわれわれの考えをお見通しだった。受賞は、当日夜のNHKニュースにも流れ、全国から祝辞が届いた。

応募タイトルは、「日本の将来を描写する北海道津別町 若い世代が地域を解析する」である。全国屈指の強さを誇る筑波大学ラグビー部部長 中川昭先生から、人口がピーク時の1/3となった夏合宿地津別町を活性化するよう要請を受けたことがきっかけだった。

津別町は地域総合整備財団（ふるさと財団）「津別まちなか再生事業」の助成を受けた。地元人材育成とコンパクトなまちづくりを基軸とする内容で、私とそのプロデューサーに就任した2015年6月に津別町で開催したキックオフシンポジウムからスタートした。夏休み（8月10日～9月6日）には津別町役場内に学生を在駐させ、研究室一丸となって、地元住民ワークショップや津別高等学校との高大連携ワークショップの実施、沿道沿いの照度計測、アプリによる空き家可視化、道の駅利用実態・商業系ニーズ・ガソリン給油量などのアンケート、これら調査や分析を集中的に展開した。改修された大規模な空き家を宿泊地と定め寝食をとる、学生15名による延べ146泊という長期にわたる事業であった。また、小樽商科大学の大津晶先生とそのゼミ生、さらには石井儀光先生ら筑波大学研究者も夏休み前後に津別入りし講演などの形も

含めご協力をいただいた。

2. 大宮会長の慧眼—北九州—

筑波大学は高大連携活動が活発である。OR関係では、吉瀬章子先生主体で最適化をテーマに活動を展開しており、11月8日の筑波大学高大連携シンポジウムにて大宮会長からご講評をいただきたい旨を滝沢事務局長にお願いした。そして北九州で開催された秋季研究発表会の昼休みに5分だけ大宮会長との面談の機会をいただいた。事務局長から、「2カ月後の日程調整であり難しいが誠意をお伝えすることが大事だ」とアドバイスを受けた。それを踏まえ、筑波大学による一連の高大連携活動、今回参加する高校生は過疎地津別、被災地いわき、地元茨城であること、さらには過去に鳩山由紀夫元首相が参加されたことなど、一過性のイベントではないことを強調させていただいた。1週間後に大宮会長からご出席という朗報を頂戴することで、本学学長がシンポジウムで挨拶をすることになり、例年と比べ格式が格段に上がった。

シンポジウム前に、内閣官房主催「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015」に応募するよう大宮会長からご提案をいただいた。コンテストの趣旨は、RESASというビックデータを活用した地域経済分析システムを使うことで、客観的に政策提案することであった。オペレーションズ・リサーチがまさに挑戦すべきテーマであった。しかし、既に公募が始まっており検討期間が短く、どちらかというところ消極的に応募を決意したのである。まさに、「参加することに意義がある」クーベルタン精神の心境であった。

テーマについては、多くの自治体との共同研究実績があるが、地方創生で最も厳しい津別との共同研究しかないと思った。都市計測実験室総勢15名の活動ではあったが、最終的には、津別に20泊以上も滞在し最も汗をかいた大学院社会工学専攻1年竹屋裕樹君、同じく湊信乃介君に加え、研究室OBの小林隆史先生

(東京工業大学), 私と4名で登録をした。

3. 都市計測実験室の伝統一名古屋

12月初旬に最終選考に残ったという吉報を受けたが、まさに青天の霹靂であった。これで津別町の皆さんに喜んでいただけると安堵した。数日後に一次審査通過リストを見た瞬間、大臣賞を取れるかもという感触を得た。それはコンテストのテーマが地方創生であり、東京から遠隔の過疎地が重視されるであろうこと。一次審査通過者には地域活性化で既に有名な自治体が複数含まれていたこと。さらに、地方創生には若い世代の参画が必須であることなどからである。

受賞できれば、津別活性化のエンジンになると確信しギアチェンジした。そして「失うものはない。今回は1位を狙う。2位も6位も同じだ」と学生を鼓舞したのである。当研究室は理論研究が主体で、実践成果を必ずしも求められておらず、本命狙いに専念できる環境であった。最終プレゼンは5分、パワーポイント上限12枚という発表条件、さらに発表順がラストという好位置も追い風となった。短い発表時間では「リズム」や「キレ」で聴衆の心をつかむことが重要であるが、若い学生には演出への抵抗がない。コンテスト全体の流れが読めた。

コンテスト最終審査会は偶然にも12月12~13日に開催の「都市のORワークショップ(南山大学)」と重なった。13日に割り当てられていた湊と竹屋の発表を12日へ移動させていただくとともに、発表練習の配慮もいただいた(図1参照)。お陰様で本年度定年退職される山本芳嗣先生らから親身なコメントを頂戴した。弾力的に対応下さった鈴木敦夫先生をはじめ南山大学都市のOR関係者に御礼を申し上げたい。

全体の士気は高く必勝会と称して深夜1時まで飲み翌朝7時にホテルを出発した。移動の新幹線でも打ち合わせし発表会場へ入った。学生に発表ポイントとして指示したのは3点だけ。「真面目にやるな」、「前の発表内容を受けろ」、そして「聴衆から笑いを3回とれ」。発表練習は少なかったが、笑い(失笑?)も予定どおり3回獲得でき、本番の出来は完璧であった。

4. おわりに一東京一

研究室の成果が認められ、発表により大臣賞を受賞

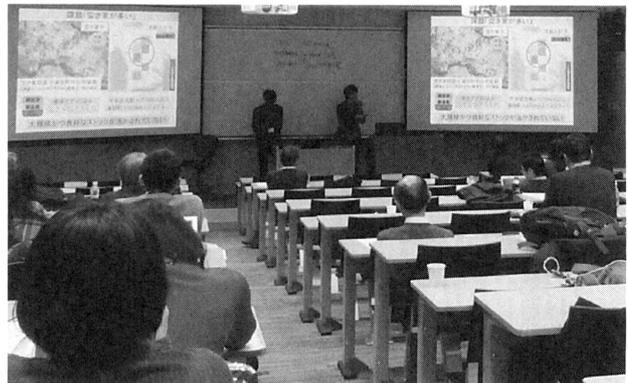


図1 都市のORワークショップ@南山大学(2015/12/12)



図2 石破大臣からの賞状授与(2015/12/13)

できたことは、学生にとって何よりよい経験となり、とても有意義な機会であった。審査会が終わり最後に担当者にご挨拶を申し上げたところ、「ぜひ連覇を」と応援を受けた。私としてはコンテスト受賞よりも津別活性化が目的であり返答に困ってしまった。

共同研究は津別町から「薬にもすすがる思いでお願いしている」「先生を信じます」と言われスタートし、厳しい財政から研究費を捻出いただいている。そんな津別への愛、それが受賞につながったと思っている。

御礼

大宮現会長からは、「時代を読み切る力」の重要性を学んだ。都市計測実験室の創始者である腰塚前会長からは「都市計画での客観性、現場主義」という今回のコンテストの考えと合致する研究姿勢を教わってきた。猿渡康文・編集理事、滝沢壽樹・事務局長も含めOR学会関係者へ厚く御礼を申し上げます。